

天から下って来た生けるパン

ヨハネ福音書6:41-51

【新改訳2017】

- 6:41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンです」と言われたので、イエスについて小声で文句を言い始めた。
- 6:42 彼らは言った。「あれは、ヨセフの子イエスではないか。私たちは父親と母親を知っている。どうして今、『わたしは天から下って来た』と言ったりするのか。」
- 6:43 イエスは彼らに答えられた。「自分たちの間で小声で文句を言うのはやめなさい。」
- 6:44 わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。わたしはその人を終わりの日によみがえらせます。
- 6:45 預言者たちの書に、『彼らはみな、神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます。
- 6:46 父を見た者はだれもいません。ただ神から出た者だけが、父を見たのです。
- 6:47 まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。
- 6:48 わたしはいのちのパンです。
- 6:49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。
- 6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。
- 6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。

(6:51)ギリシャ語・英語／行間訳

ἐγὼ εἰμι ὁ ἄρτος ὁ ζῶν ὁ ἐκ τοῦ οὐρανοῦ καταβάς .
 I am the bread (the) living that from (the) heaven. came down .
 ἂν τις φάγη ἐκ τούτου τοῦ ἄρτου ζήσει εἰς τὸν αἰῶνα, καὶ ὁ
 if anyone eats of this (the) bread, he will live to the age and the
 ἄρτος δὲ ὃν ἐγὼ δώσω ἡ σὰρξ μου ἐστὶν ὑπὲρ τῆς τοῦ κόσμου ζωῆς.
 bread and that I will give (the) flesh my is for the of the world life.

【祈りながら考えよう】

- (1) 人間は自力で主イエスのもとに来る力がないのに、主イエスを信じる事が出来るようになるのはなぜですか。
- (2) 主イエスを信じる者が永遠のいのちを持つのは、いつのことですか。
- (3) 天から下って来たパンであるイエスは、どのようにして私たちにいのちを与えることが出来るのですか。

【解説】

(1) キリストが地上におられた時の貧しい状態は、生まれながらの人にはつまずきの石である

「ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンです」と言われたので、イエスについて小声で文句を言い始めた」 彼らは言った。「あれは、ヨセフの子イエスではないか。私たちは父親と母親を知っている。どうして今、『わたしは天から下って来た』と言ったりするのか。」(41-42節)

今日の箇所は、40節までの所とは違った場所での出来事である。今までの所では、主が話しておられる対象は五千人以上の給食の奇蹟の後に、湖の向こうから主について来た群衆であった。

41節からは「ユダヤ人たち」に変わり、59節では「これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである」と記されていて、それが41節からであると考えられる。彼らは、カペナウムの会堂の指導者たちであったと思われる。

主イエスが、敵を制圧する王として、従う者たちに与える富と栄誉を携え、強大な軍隊を備えて来られたのであれば、彼らは喜んで主をお迎えしたかもしれない。しかし、貧しく低い、苦難のメシアは、彼らにはつまずきであった。

それと同じことは使徒時代にも見られた。十字架につけられたキリストは、「ユ



ダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚か」(Iコリント1:23)であった。今日もそうである。人々は、キリストの道徳的な教えは良い、キリストの模範や自己犠牲もすばらしいと言う。しかし、十字架につけられたキリストは信じるに値しないという。

(2) 人間は生まれつきの状態では、悔い改めたり、信じたりすることができない

「わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。」(44節) 主は44節で、御父が恵みによって、人の心を引き寄せてくださらなければ、人が信じることはない、と言っておられる。

私たちは、霊的に死んでいて、自力でイエスのもとに来る力さえもない存在であった。それなのに、イエス・キリストを信じるようになったのはなぜか。

私たちの心の中に聖霊の神が働き、心の性格を変え、イエス・キリストを心から受け入れることができるようになった。そのすべてを導いてくださったのが「父なる神」であるということである。御父がまずその心と人生に働きかけて下さらなければ、自分の恐るべき罪過と救い主の必要性に気づくこともなかった。

私たちが必要としている力は、新しい意志である。私たちはまさにこの点において、御父が「引き寄せてくださること」を必要としている。

(3) 信者の救いは現在のことである

「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています」(47節)

主イエスは、ご自身を信じる者はだれでも「永遠のいのちを持っている」と言われた。この御言葉で、いのちは今持っているものであるということに注意すべきである。信じる者は終わりのさばきの日にいのちを持つ、とは言われていない。いのちは今この時、この世界で、信じる者のものである。信じているその時に、いのちを持っているのである。

このことは、私たちの理解すべき平安と大いにかかわっているが、これについては誤った捕らえ方も多い。なんと多くの人々が、神によってゆるされ、受け入れられることは、この世にある間には得られないことであり、長い間の悔い改めと信仰ときよさによって獲得されるもので、終わりの日に神の法廷で受け取るであろうが、この世にいる間には、決して、得ていると主張してはならないものだ、と考えている。その考えは、全く誤っている。

罪人がキリストを信じたその時に、義と認められ、受け入れられる。彼は罪に定められることはない。彼は神との平和を持っている。それもただちにそうなる。自分がどんなに自覚していないとしても、彼の名はいのちの書に載っている。彼は天への資格を持っている。この真理を知る者は幸いである。これは福音の本質的な一面である。

(4) 食べることは信じることである、物理的に食べることではない

「しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません」(50節)

主イエスは、マナと対比して、ご自身のことを「天から下って来たパン」と表現された。だれでもこのパンを食べるなら「死ぬこと」はない、と言う。とは言っても、肉体が死なない、という意味ではなく、仮に肉体が死んでも、体は終わりの日によみがえり、主とともに永遠に過ごすようになるのである。

この節と以下の節において、主イエスは、ご自身を食することについて繰り返し語られた。文字通り、物理的な意味において人がイエスを食べなければならぬ、と語られたのか。

ローマカトリック教会は、ミサ聖祭で主を食さなければならぬことを主がここで語られたと教える。何らかの奇跡的な方法でパンとぶどう酒はキリストの肉体と血に変わるものであり、救われるためには、そのパンとぶどう酒にあずからなければならぬ、と教える(カトリック教会の教え/カトリック中央協議会/2003年)。

そのような教えは、悪魔的であり、嫌悪すべきものである。イエスが言われたのはそのようなことではない。前後関係から見て、「キリストを食する」とは「キリストを信じること」である。主イエス・キリストを救い主として信じる私たちは、信仰によって、主を自分の中に摂取しているのである。

(5) イエスは、どのようにして私たちにいのちを与えることが出来るのか

「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」(51節)

イエスは「生けるパン」である。ご自身が生きておられる、というだけではなく、いのちを分与されるという。「このパン」を食べる者は「永遠に生きる」。

しかし、どのようにしてそんなことが可能なのか。どのようにして主が、さばかれるべき罪人に永遠のいのちを与えることができるのだろうか。

その答えは、この節の後半にある。「わたしが与えようとするパン(未来形/新改訳第3版)は、世のいのちのための、わたしの肉です」。ここで、主イエスは「十字架上でのご自身の死」を予見しておられる(NLT STUDY BIBLE)。

主はご自身の「いのち」を罪人の贖い代として差し出そうとしておられる。主の体は砕かれ、その血は罪のいけにえとして注ぎ出されることになっていた。私たちの罪の身代わりの刑罰を、主は受けることになっていた。

しかし、どうして主はそのようなことをなさるのだろうか。この世の私たちが救われるためにそうされたのである。主が死なれるのはユダヤ人のためだけでなく、選民のためでもない。主の死は全世界の人をカバーするだけの十分な価値がある。全世界の人がみな救われる、という意味ではなく、もしすべての人がイエスのもとに来たとしても、十字架の主イエスのみわざには、全世界の人を救う十分な価値がある、という意味である。

